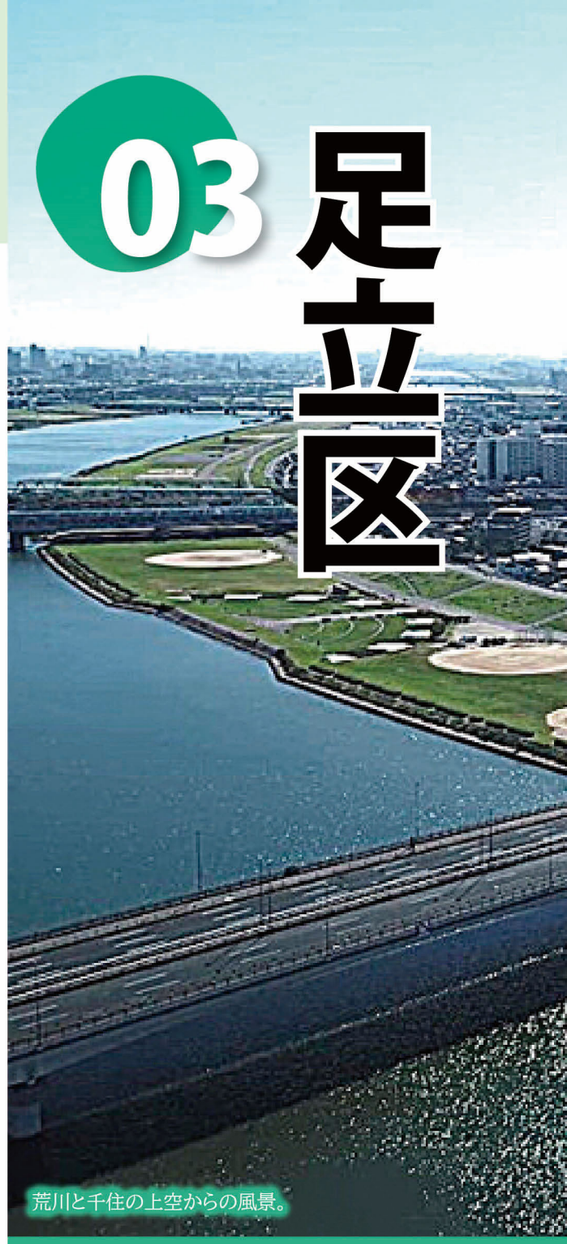
03 足立区



荒川と千住の上空からの風景。

人口（令和2年国勢調査）：69万5043人
面積（参考）：53.25平方キロメートル

地域特性と課題

区が抱える課題は、「治安」「健康」「学力」「貧困の連鎖」の4つのボトルネック的課題（＝克服しない限り正当な評価が得られない課題）と区に対するマイナスイメージである。

中でも「貧困の連鎖」は根底の原因と捉えている。

貧困は固定化すると多様なチャレンジすら得られず、将来、「希望格差」を生み出してしまう。

区としては貧困の連鎖を断ち切るために子どもへの支援を重視し、全国の自治体に先駆け、2015年に「子どもの貧困対策担当課」を設置し、子どもの貧困対策に真摯に取り組んでいる。

また、若い世代を中心に「治安が悪い街」という印象が強い。メディアで面白おかしく揶揄されることが多く、“事実”ではなく“印象”に左右されている。

こうした区外から見た区のイメージ改善も喫緊の課題である。

そこで、印象でつくられたマイナスイメージを取り除くため、足立区のポテンシャルの高さなどの情報の発信や、地域で活躍する人や子どもたちのロールモデルとなる意欲ある人を輩出することにより、子どもや若者がロールモデルに出会い、体験・経験を重ねることで、生まれ育った環境に左右されずに自分で道を切り拓くことができるようになることを目指している。

【ボトルネック的課題の現状】（2022年度時点）

「貧困」	生活保護世帯数　東京23区1位・所得水準　23区最下位
	就学援助率は全国平均の約2倍
	子どもの自己肯定感は全国平均から7ポイント以上低い。
	（足立区/国平均：小学生74.1%/81.3%　中学生66.3%/74.1%）
「治安」	刑法犯認知件数16,843件（ピーク時）⇒　3,664件まで減少
「学力」	全国学力調査の結果が小中学校ともに全国平均点以下 ⇒　全国平均点を上回る
「健康」	区民の健康寿命が都平均より2歳短い　⇒　男性1.66歳、女性1.25歳に縮まる。

1 アヤセ未来会議から生まれたチームでフリーコーヒースタンドに挑戦。

2「子ども食堂」への支援も強化。
3「子どもの居場所」を増やすことに注力。

SDGs推進に向けた取り組み

多様なステークホルダーと挑む「貧困の連鎖」解消に向けた都市型モデルの構築

取り組みの概要

「次代の担い手となる子どもや若者が、生まれ育った環境に左右されることなく自分を信じて前向きに挑戦しているまち」、「あらゆる世代の住民や事業者も、何事にも意欲的にチャレンジできるまち」を実現することで、レジリエンス（逆境を乗り越える力）と挑戦する意欲、経済的な自立力を高めていく。

そうすることで、次代の担い手である子どもたちが「生き抜く力」を身につけ、自分の人生を切り拓き、貧困の連鎖に陥ることなく社会で自立していくことを目指している。

あやせ未来創造活動拠点プロジェクト

綾瀬エリアをモデル地区とし、若い世代をターゲットにしている。理由は、地域住民を対象にしたアンケートから、地域活動に意欲的な若い世代が一定数いるが、十分に生かし切れていないことが判明したからである。

彼らがもつ潜在的な「やりたい」「やってみたい」という想いと向き合い、気軽なチャレンジを後押ししていく。

こうした街中で意欲ある大人がチャレンジする過程を可視化し、それを見た子どもたちが自分の将来を描く一助とする。

具体的な取り組み

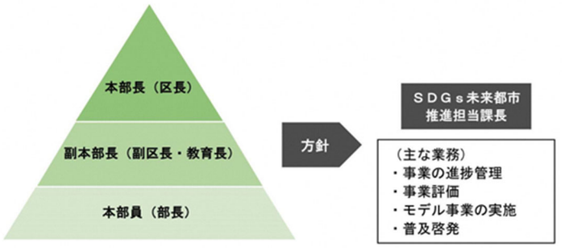
《アヤセ未来会議》

「綾瀬をもっと愛される地域に」をコンセプトに、少し先を見据え、これからの綾瀬を作るために必要なアイデアを提案し、自ら実践していく場。区内外問わず、綾瀬に関心のある方ならどなたでも参加できる。全5回のワークショップを通して、これまであまり地域での活動に参加していなかった方々により、「わたしたち」が描く綾瀬を実現するための一歩を踏み出している。

《高架下No Border LAB》

長期間空いていた、高架下物件を区が借り上げ綾瀬の新しい賑わい創出拠点として地域住民と共に再生していく。人と人とのつながりを生み出すイベントや子ども向けの企画など、多様なアクティビティを実施していく。2023年秋頃のオープンを目指して準備を進めている。

当該施設は、区民や企業、団体など多様なステークホルダーが結びつき、新たな活力が生み出される場としていきたい。



【体制図のイメージ（例）】

4 綾瀬駅西口高架下のシャッター街。
5「大学体験教室」の様子。

足立区の未来都市に向けての取り組み

取り組みにあたり苦労したことや乗り越えたこと

アヤセ未来会議は、あえてテーマを決めずに、参加者の「やりたい」「やってみたい」という思いから始まりました。そのため、「具体的なテーマがない」と、行政として、どうなっていくかわからないという不安がありました。しかし、行政が前に出過ぎないというこのスタンスが逆に参加者の主体性を育み、場への参画意識の醸成につながったのではないかと考えています。実際に、回数を重ねるごとに、参加者の熱量は上がっていきました。また、参加者とはフラットな関係を心がけ、積極的にコミュニケーションを図りながら、拾った声は、プログラム内容に反映させるなど柔軟に対応しました。

本会議を通して、参加者の綾瀬への愛着心や期待感が上昇する結果が得られました。

ほかにも、SDGsの目標は多岐に渡っていることから、各分野の所属と連携しながら包括的に事業に取り組んでいく必要があります。

そのため、2021年度から、SDGsの積極的な推進を図るとともに、SDGsに関する協議及び決定を行う機関として、「足立区SDGs推進本部」を設置しました。

本部長は区長とし、推進本部を統括します。副本部長は副区長及び教育長とし、本部員には部長級の職にある方々を配置しました。

今後の展開

今後とも地域住民や企業と連携しながら、計画倒れにならないよう、コミュニケーションを取りながら良い関係を築いていきたいと考えています。進行中の事業はもちろんのこと、これから始まっていく事業も滞りなく進めていきます。

2030年のあるべき姿として、次の4項目を掲げて展開して参ります。

《誰もが一歩踏み出せるレジリエンスの高いまち》

逆境を乗り越える力と挑戦する意欲、経済的な自立力を高め、貧困や格差の連鎖を断つ持続可能な自治体の都市型モデルを構築する。

《子どもと若者が「夢」や「希望」をもって挑戦できるまち》

経験・体験の機会を通じて、将来の夢を見つけ実現に向けて努力し、挑戦し続けることができる。

《新しいチャレンジを通して、成長できるまち》

事業者が販路拡大等に挑戦する意欲が醸成されている。

《オール足立で脱炭素社会の実現に向けて挑戦するまち》

環境意識の高い区民が育ち、低炭素型の行動変容が行なわれている。

1 毎回活発な意見交換が行われている。写真はより良い綾瀬の未来に向けて、自分たちに何ができるのか考えている様子。

他地域への展開

若い世代が地域に定着しないと悩む自治体も多いのではないかと考えられます。当区のモデル事業は、ポテンシャルを持つ若い世代を活かしていく内容となっています。そのため、若い世代が地域に参画しやすいモデルの一つになっていきたいと考えています。

将来的な自走に向けた取り組み

将来世代が安心して暮らすことができるまちづくりには、企業から個人へ、そして多くのステークホルダーにまで、「足立SDGs」を波及させることが必要です。

区と事業者等が連携しSDGsの普及啓発やSDGs達成に向けた取り組みを推進し、自律的好循環の形成を図るために次の制度を構築しています。

《あだちSDGsパートナー【登録制度】》

SDGsの達成に向けた取り組みを行っている区内外の事業者や団体を「あだちSDGsパートナー」として登録し、持続可能なまちづくりに向けて加速していきます。

各パートナーの取り組みについては2023年3月に新しく公開した区のSDGs未来都市の特設サイト(https://www.adachi-sdgs.jp/)を通じて、広く周知を図っていきます。

パートナーや区の取り組みにより、多くの方が共感し行動に移せるように、効果的な普及啓発を工夫していきます。

■ 綾瀬在住のデザイナー作の区SDGsロゴマーク

知ると分かる。すると変わる。

SDGs MODEL ADACHI

足立区の取り組みがまとめられている特設サイトQR

2 20年近く空いていた店舗を区が借りて、地域の方々と一緒に賑わい創出の拠点として再生していく。写真は工事前の様子。